

HAKARI NO HARI

Zinbootyoo kara Suidoobasi no hoo eto hasiru Entaku no naka kara Yukute wo nagamete itara, tui Me no maeni Myoona Mono ga arawareta.

Watasi no Kuruma no sugu mae wo hasitte yuku kogatano Torakku no ueni, onazi Kata no Daibakari ga mittu nosete aru.

Sono Hakari no Dai no Ippoono Hazi kara suityokuni tatta Hasira no itadaki ni Mekata wo simesu Daiaru ga aru. Mittuno Hakari no Daiaru ga kotira wo multe sono siroi marui Kao wo misete iru. Daiaru no Omote ni kuroi Hari ga mieru. Sore ga, Kuruma no yureru ni turete Tyoosi wo awasete yure-ugoite iru.

Omosiroi koto niwa mittuno Daiaru no mittuno Hari ga hotondo onazi yooni Sindoosite iru. Mattaku hukisokuni detaramena huruekata wo mittuno Hari ga Tyoosi wo soroete huritudukete iru no de aru. Nandaka husigina Ki ga sita.

Kangaete miruto, kore mo husigi dewa nai. Onazi Sikake no Kikai ni onazi Kuruma no Sindoo ga tutawatte sore wo ugokasu no da kara, onazi Undoo wo suru nowa atarimae de aroo. Sore nara, naze kore ga

秤（はかり）の 針

神保町 から 水道橋 の 方 へと 走る 円タク の 中 から 行く手 を 眺めて いたら、 つい 目 の 前に 妙な 物 が 現れた。

私 の 車 の すぐ 前 を 走って 行く 小型の トラック の 上に、 同じ 型 の 台秤 が 三つ 載せて ある。

その 秤 の 台 の 一方の 端 から 垂直に 立った 柱 の 頂き に 目方 を 示す ダイヤル が ある。三つの 秤 の ダイヤル が こちら を 向いて その 白い 丸い 顔 を 見せて いる。ダイヤル の 表 に 黒い 針 が 見える。それが、 車 の 揺れる に 連れて 調子 を 合わせて 揺れ動いて いる。

面白い こと には 三つの ダイヤル の 三つの 針 が ほとんど 同じ ように 振動して いる。全く 不規則に でたらめな 振るえ方 を 三つの 針 が 調子 を 揃えて 振り続けて いるのである。なんだか 不思議な 気が した。

考えて 見ると、 これ も 不思議 では ない。同じ 仕掛け の 機械 に 同じ 車 の 振動 が 伝わって それ を 動かす の だ から、 同じ 運動 を する の は 当たり前 であろう。それ なら、 なぜ これ が

zibun ni husigina Kanzi wo okosasete ka.

Onazi yooni kosiraeta hazu no mono demo Kosiraekata ga somatu de attari, Kumitatekata ga zonzai de attari sureba, uwabeno Mikake wa onazi de attemo, kono Baai no Yurekata wa konnani yoku sorou wake ni yukanai de aroo.

Sore ga, kanari yoku dekite ireba koso korehodo madeni Hari no Sindoo ga sorotte iru no de aroo.

Kono, Gomakasi no nai, tadasiku tukurareta Hakari -kooiu kityoomenna, syoodikina, tanomosii Kikai no ituwaranu Undoo no Utukusisa wo, kono awatadasii midarigamasii Mati no Yukiki no nakani miidasita, sore ga tyotto zibun ni husigina Kimoti wo okosasete no dewa nakatta ka, to iu Ki ga suru no de aru.

[Syooowa 10n. 1gt. *Roomazi Sekai.*]

注：この随筆は、ローマ字書き文章として「六月の晴れ」以外では唯一、随筆集（『蛍光板』）に収められた。寅彦先生は愛着があったのだろうと思う。
ローマ字原文は 1985 年版全集によった。ただし、長音記号（^ˆ）に代え、母音を重ねる表記とした。

自分に不思議な感じを起こさせたか。

同じようにこしらえたはずの物でも拵え方が粗末であったり、組み立て方がぞんざいであったりすれば、うわべの見かけは同じであっても、この場合の揺れ方はこんなによく揃うわけにゆかないであろう。

それが、かなりよく出来ていればこそこれほどまでに針の振動が揃っているのであろう。

この、誤魔化しのない、正しく作られた秤 - こういう几帳面な、正直な、頼もしい機械の偽らぬ運動の美しさを、このあわただしいみだりがましい街の行き来の中に見出した、それがちょっと自分に不思議な気持ちを起こさせたのではなかったか、という気がするのである。

[昭和 10 年 1 月 『ローマ字世界』]

注：この邦字表記はローマ字の感じを残すため、「横書き・分ち書き」形式をとった。

佐藤 邦夫
(2011・1・19)